

農林水産大臣賞

株式会社カクニ茶藤

(静岡県静岡市)

粉末茶 ・アメリカ
緑茶 ・ドイツ

生産者とともに、有機栽培茶を世界へ

取り組み内容

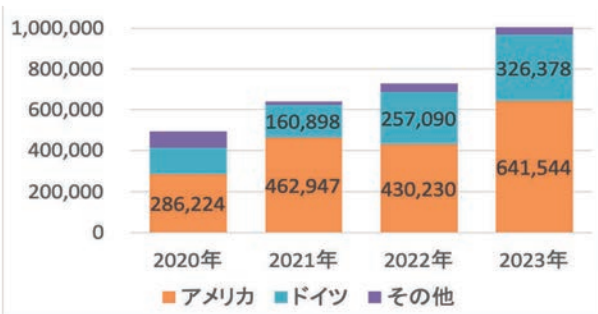
- 2011年の東日本大震災・放射能被害による深刻な経営危機から、輸出事業への参入を決意し、戦略的に輸出を進めた。現在は全売上の半数以上が輸出での売上が占め、さらにここ4年で売上は倍増。また、輸出アイテムの9割以上が有機栽培茶である。
- 顧客ニーズに応えるため、従来の分業型ではなく新たなサプライチェーンの構築に注力。有機茶生産から加工、販売まで一貫した直接生産販売体制を構築し、安定供給を可能にした。有機JAS認証、FSSC22000など数々の認証を取得。全国の茶農家や生産地と取引し、慣行栽培から有機への転換も身を切って支援。今年からは自らも生産者（認定農業者）となり、地域農業基盤の維持にも貢献する。

輸出の仕組みチャート



輸出実績の推移

国別輸出金額の推移（千円）



品目別輸出量の推移（kg）



輸出に取り組んだ背景

- 2011年、放射能被害による経営危機をきっかけに本格的に輸出事業へ進出。積極的な新規開拓営業を行ってきていないが、海外各国で異なる各種認証を取得し、ニーズに合った高品質な商品づくりに信頼関係が築かれている。
- 全米で複数店舗を展開するコーヒーチェーンとの取引開始により、売上額がぐんと増えた。抹茶の鮮やかな色合い、豊かな風味はヘルシー志向の高まる世界市場でますます人気が高まっている。抹茶はグレードによって飲料用や加工用と使い分けられており、カフェなどでは抹茶ラテなどの飲料に、加工ではドーナツや菓子、カフェイン飲料の原料としても使用されている。

課題と解決のポイント

👍 中東市場の開拓

欧米の日本茶展示会などの入場者数が数年前から減少し市場がやや頭打ちになっていると感じ、次の市場を開拓しようと東南アジアや中東に目を向けている。

👍 徹底した品質管理

アメリカの食品安全強化法や欧州の残留農薬基準に合わせたポジティブリスト作成など、世界各国のさまざまな基準に則った適正な管理が求められている。

👍 有機栽培への転換

こだわりと熱量を持った生産者と契約しているが、慣行栽培では輸出対象とならない。生産者側に有機栽培への挑戦する意思があれば進んで支援している。

これまでの営業方針を変え、24年からは東南アジアや中東の展示会へ参加。すぐにサウジアラビアとの新規取引がはじまり、現地では非常にグレードの高い抹茶を使った加工工場、飲料工場などを新規設立する計画がスピーディに進んでいる。

年々厳しくなる食品安全や法規制への対応は、専門チームによってタイムロスなく管理。また、品評会には生産者も参加し、成分分析、官能検査を経て、グレード分けが行われる。評価基準を共有し、より質の高い茶の生産・製造へ取り組む。

有機転換には3年を要するが、その間も全量を買取りを実施し、生産者の生活を支える。有機転換後は1.5倍～2.5倍ほどの買い取り価格となるため、生産者のモチベーションも上がる。転換中に買い取った茶葉を活かす商品を開発中。

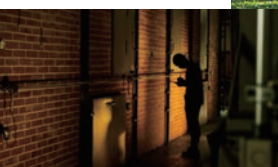


▲ 24年に初参加したドバイ展示会

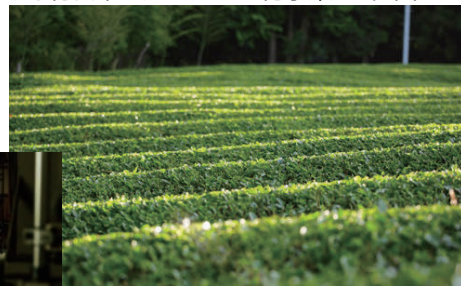


◀ 展示会を契機にサウジアラビアでの取引がはじまった

抹茶の原料となるてん茶の製造風景 ▼



放棄茶園の再生にも着手したり、静岡県が実施する有機茶バリューチェーン化事業にも参画。▼



今後の展望

- インド市場にはコロナ前から取り組んでおり、トルコとインドネシアでも商談が進行中。
- 「生産者のwinなくして商のwinなし」との思いから、生産者とは一蓮托生の信頼関係で挑戦を続ける。明確な買い取り価格の提示により生産者は栽培圃場拡大に意欲的に取り組んでいる。2024年からは自らも認定農業者となり、強固な農業基盤づくりに力を注ぐ。
- 世界各国の人々の味の好みや嗜好の違いを網羅し、マーケットに合ったセグメントの商品提案を行うことで、さらなるマーケットの開拓が期待できる。